

『TURN』でのサルサ交流を通して

社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房

斉藤 由子

(魅力の発信 アート 偏見のない関わり)

1. はじめに

当所は、18歳以上の知的障害のある方の就労支援継続B型事業所として、①働くこと②身体づくり③仲間づくり④余暇支援を4つの柱として日々のプログラムを組み立て、主体性が発揮しやすい場を意図して盛り込みながら、自分らしく力を発揮し、仲間と共に充実した生活を送れることを目指している。今回は、2年半のTURN交流プログラムの様子を紹介し、交流を通して感じたことを考察したい。

(TURNとは、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトの総称。2015年、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトの一つとして始動した後、2017年度より、東京2020公認文化オリンピックアードとして実施している。)

2. 実践内容**①令和元年度(2019年度)の交流**

最初は、「ラマーニャとゆみ」という、ラテンミュージックバンドのパポさん、セバスチャンさんと、ダンサーのゆみさんのチームでの交流からスタート。まずは、利用者の皆さんのこと、日常の過ごし方を知っていただくため、日々の作業や活動に参加いただく。6～3月、24回の交流中、共に仕事をし、お茶を飲み、行事を楽しむといった過ごしから、サルサ音楽・ダンスに触れるプログラムにも繋がったことで、よりスムーズに参加できたように思う。8月に東京都美術館で開催された『TURN フェス』には、有志の数名が参加、上町工房開催の「上町グランサマーフェス」では、全員でリンボーダンスとサルサを踊った。

**②令和2年度(2020年度)の交流**

2020年は新型コロナウイルスの感染拡大、緊急事態宣言の発令等、これまでにない状況の中、感染拡大防止のため交流は中止となる。パポさんとゆみさん、事務局スタッフの方々と話し合い、9・10月は、オンラインで繋いで『リモートdeサルサ』を実施、11月には、10か月ぶりに実際に会っての交流を再開。状況に合わせてリモートも活用しながら、年間7回の交流を行った。

③令和3年度(2021年度)の交流

リモート活用もしながら、パポさんとの交流を現在まで10回実施。8月のそれぞれのフェスに向け、皆さんの好きな、踊りやすい定番曲の数曲を繰り返し練習してきた。TURNフェスはオンラインにてダンス交流の映像を配信、上町フェスでは他事業所とオンラインで繋がり『みんなでサルサ』を披露。

3. 結果

この2年半の交流の中では、当初目標にしていた、『利用者それぞれの得意な動きなどをピックアップした、上町オリジナルサルサの完成』までには至ることはできなかった。とはいえ、想像していた以上に多くの方がサルサのリズムやダンスに馴染み、皆が交流を楽しむことができています。

イレギュラーが苦手な方、皆が集まる場や人に緊張感がある方、動きの模倣が難しい方も多い。言語理解の程度や、言葉でのコミュニケーションの取り方も様々。そんな私たちのサルサは、皆同じように踊れなくても OK、できる・できないは重要ではない、見ていても休憩していても OK、きっとそれぞれに何かを感じているはず、そこから自分の楽しみ方ができるようになれば、ということを目指したことで、サルサ交流は居心地の良い、楽しい時間になっていったように思う。交流に関わる方々が皆、一見マイナスにもみえる利用者さんの言動があった際にも、それを咎めたり、否定したりするような様子を全く見せなかったことも、安心して交流できた理由かもしれない。他の場では、言葉の繰り返しや距離の近さから誤解を受けやすく、注意の対象になりがちの方も、『ダンスが上手、ユニークな方』と肯定的に受け入れられたことで、課題となるような言動は出ず、常に「〇〇さんすごいね！」とプラスのクローズアップをされる機会にもなっていた。一人一人の動きや表情をよく見つつ、皆に対してフラットに接することができる姿勢は、アーティストならではの感性なのかと有難く感じさせてもらった。

4. 考察

サルサ交流を開始した当初は、『日本人でない方とのコミュニケーション大丈夫？』や『きれいな女性、肌が見えたりして大丈夫？』というような『心配』も多少きかれた。しかし、交流を始めてすぐに、改めて、利用者の皆さんの、『垣根のなさ』というような素直な、真つすぐな人との出会いの仕方を感じてもらっている。私たちよりずっと、外見や言葉に頼っていないからこそ、お相手がどんな風に自分をみているのか、どんな風に接してくれるのかを繊細に感じ取り、好意的に捉えてくれる相手には、自然に良い関わりが芽生えてくるのだと感じる。そして、その「好意的・肯定的」と感じるのは、一緒に面白がってくれる、笑ってくれる、楽しさの共有という面が大きいということにも気付かされた。

サルサ交流を通して心も体も動いた。アーティストさん達の、偏見なく、個々を尊重する関わりが、利用者の伸びやかさを引き出してきていたことを、自らの関わりを振返るヒントにしていきたい。

〇〇

<助言者コメント> 横山 順一（日本体育大学体育学部健康学科教授）

.....

発表事例を興味深く拝聴させていただきました。

笑顔が溢れ、とても楽しそうで、見聞きしただけでもわくわくして参加したくなるような発表でした。東京 2020 公認文化オリンピックである「TURN 交流プログラム」を導入し、「上町オリジナルサルサの完成」という目標を立てて、行動を共に楽しむことから少しずつサルサ音楽・ダンスに触れることから始めて成果をあげたこと。そして途中からの予期せぬ新型コロナウイルスの感染拡大にもプログラムを途切らすことなく、リモートを活用して交流を続けてきたこと。コロナ禍でのたいへんな施設運営が続く中において継続してきたこの取り組みからは、職員さんたちの熱意がとても伝わってきました。日頃から利用者さんと真摯に向き合っている姿が思い浮かびます。

考察にもありますように、新たな交流を始める際には様々な心配事が付きものです。しかしながら、一歩踏み出してやってみなければ新たな発見は得られず、利用者さんたちの可能性を引き出すことにも繋がりません。こうした取り組みから得られた気付きは、利用者さんとの次なる関わりに必ず生きてくるものと思います。

今回、学会で発表することにより、行ってきた取り組みに対してきちんと振り返りができたこと、そして外部へ向けて発信できたことは、とても意義があると考えます。

ぜひ、上町オリジナルサルサを完成させてください。続きの報告を期待しております。